

同人誌（2017年11月号）

風狂

風狂の会

風狂第40号目次

詩

蟬	原 詩夏至
あっち側とこっち側	なべくらますみ
点景	北岡 善寿
登山電車の優しさ	高村 昌憲
腕時計	高 裕香
アフター三百年	出雲 筑三

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十四）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

伝説の一手	神宮 清志
-------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（六）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年10月号）

蟬よ
おまえの
啄木みたいに
鉢の開いた
あたまは
空っぽで――

中には
きっと
夏空みたいな
真っ青な
〈空虚〉が
広がっているんだ
どこまでも。

苦節七年の
地道な善根を
一週間で
忽ち使い果たす
お祭り野郎よ
陽気なお人好しよ
おまえは
ひょっとして――

ここを
〈天国〉だと
〈歴史の終焉〉だと
てっきり
思い込んでいるんじゃないのかい？

だが
残念でした！
ここは
まだまだ
〈夢の中の夢〉

バブルのような
乱痴気騒ぎの後
おまえを訪れるのは
いわば
不意打ちめく
〈二度目の死〉。

とはいえ
おまえの
救いようのない
勘違いの果ての
歓喜のどら声は
なぜか
今しも
雲の彼方の
真っ青な
〈永遠〉に
わんわん
鳴り響いているのだが。

少年はとても驚いていた
いや その違いに感動していたようだ
顔が輝いていたし笑ってもいたもの

時々はお母さんについてきて
ポテトチップスやアイスを買ってもらう
たまには
ねえ 今夜のおかずコロッケにして
なんていうこともある

今日は違う
お父さんとお姉ちゃんと来ている
お父さんが作った大根やホウレンソウ
大きなプラスチックのカゴに入れて
地元産野菜コーナー と書かれた棚に置く

向こうの方に魚売り場が見える
その隣のコーナーにはソーセージも売っている
でもそっちの方には行かない
今日は買いに来たのではない
売りに来たのだ
さっきまでうちの畑にあった野菜を
お父さんが作った野菜を

知らないお婆さんが
葉っぱのついた大根をおねえちゃんから受け取った
お父さんが作った大根
おねえちゃんがありがとうございましたって言った
少年も言いそうになったけど言えなかった

少年はお尻のところで腕を組み
ちょっと跳ねてみた
うれしかった
いつもとちがう景色が見えて

鳥が公園の広い芝生に集まっている
人影は一つもなくて鳥一色
何者が指令を出したのか
点々と程よい間隔にばら撒かれた
西瓜の種のような配列である
身動きもせず嘘のように静かだ
ステージもスピーカーもない
委員長の勇ましい演説も
来賓の挨拶も聞こえて来ない
労働歌の合唱は勿論ない
しかしその日はメーデーである
鳥どもは解散の指令が出るまでは
儀式の静粛な空気に浸るつもりか
間違ってもカァーと鳴くことはない

紅葉の季節だから箱根へ行く
箱根湯本から登山電車に乗る
強羅までの六つの駅が優しく
両親のいない顔を赤く変える

働いていた時には見えない空
茜色に輝く遠い景色は宝物だ
特別待遇だらけの世の中から
潔く決別した弟家族との旅だ

年に一度の温泉地巡りの旅だ
二家族の七名が一緒に楽しむ
出世とは縁が無かった我々だ
登山電車にも最後尾に乗込む

塔ノ沢・大平台・宮ノ下まで
スイッチバックが三回もある
出世をすれば自由が無いので
平日なら仕事机の電話が鳴る

最後尾だと思って乗ったけど
強羅に着いた時は先頭だった
年金暮らしに余裕は無いけど
誰よりも充実した一日だった

電池の入れ替えをすれば動く腕時計
忙しさにかまけてか
引き出しの中に入れっぱなしにしてある。

舶来時計の電池の入れ替えは高い
電池代でお安い時計が買える
それもファッショナブルでお洒落

無精なのか・・・面倒なのか・・・
電池が切れたら買い替え 買い替え
とうとう カルチェに似た時計も電池切れ

店先でカルチェ風を探すがなかなかない
引き出しの中で眠っている腕時計を探す
これは、主人が海外出張の時のお土産品

ホームセンターで
電池の入れ替えと革バンドの取り換え
十数年ぶりに 時が動き出した

なぜか、主人の腕では
結納でプレゼントしたクレドールが
今も 静かに時を刻んでいる。

今日はお前さんの誕生日
奮発して最高のお米を使った祝い膳
そう北海道のこしひかり

明日は休みなので
川越より直行の水上バスに乗り
東京見物しましょう

東京湾人気のシラス丼も
ご馳走してあげる
めっちゃ美味いわよ

わたし好きなの
向こう岸から眺める
ひなびた日比谷の浜

よく頑張ったわね
一等航海士合格 さすがね
銀座ってどこなの



三浦 逸雄 「午後の室」 120号（麻布・油彩）

このところ寝床に入って必ず頭に思い浮かべることがあり、そのことを考えているうちにいつの間にか眠りに落ちている。それは将棋の棋譜である。初手から投了まで一局の将棋をすべて覚えていて、その細部の変化まで再現することができる。よってこの一局は何も見なくても、並べながら解説することが可能である。あまりにすごい一局だったので何度も鑑賞しているうちに自然と覚えてしまったのだ。寝床に入ると、自然と指先が将棋の駒をつまむ形になり、脳内の将棋盤上で駒を進めながら、いつの間にか眠りに入っている。いわばこれが最良の睡眠薬となってしまった。夜中に目が覚めると、先程の続きを指しはじめて、またいつの間にか寝に落ちている。

その一局とはNHK杯選手権試合で羽生善治二冠王が加藤一二三九段を相手に指した一局である。この対局で指した「5二銀」の一手があまりに凄い手なので、今もって伝説の一手として語り継がれている。NHK杯戦はもとより将棋界全体でもこんな一手はめったに見られるものではない。いまから二八年ほど前のテレビ対局であった。このときの羽生は一八歳で五段だった。まだ少年の面影がある棋士で、その勝ち方の凄さに大きな話題を集めていた。対するは「神武以来の天才」の異名を取る加藤九段、このとき四八歳だった。四八歳といえば指し盛りは過ぎつつあるもののまだまだ第一級の棋士であることは自他共に認めていた。

羽生五段の先手番で対局が始まり、羽生は第一手に角道を開けた。対する加藤九段は飛車先の歩を伸ばし、おたがい飛車先を伸ばす。飛車先の歩が自陣の角頭に迫ったとき、加藤九段は金を角の脇に上げて3二金と備えるのが常で、まず100%そのように指す。ところがここで持ち時間の半分くらいを使う大長考をした。こういうところがプロとアマの違いであろう。アマは先へ進んで難しくなってから考える。もつといえは局面が悪くなってから長考する。しかしプロはそうなる前に長考する。とはいえこんな解りきったところで、持ち時間を半分も使うとは度が過ぎていないか。こういうところが加藤九段の不思議がられているところのひとつである。この場合加藤九段は3二金と上がる手を考えているのではない。それはどうに検討済みで、じつは他の手を考えている。ここで角道を開けたらどうかとか、端歩をついたらどうか、といったことを考えている。それだけ深く考えたのなら、その手を指して見たくなるところだが、予定の3二金と指して平然としている。ここが加藤九段の余人には理解しがたいところである。

要するに加藤九段は真理探究者なのだ。こうしたところをゆるがせにしないで、徹底的に検討する、そうすることが楽しい。ひとつには一分将棋の名人といわれるように、時間がなくなっても指せるという自信がある。そこで大長考が可能になる。早指しの人には時間が無くなると間違えやすいので、後に時間を残しておきたいので早指しになる。それはともかく加藤九段は真理を追究して読みに読む。このひとの読みの深さは定評がある。ここから先は誰にも分からないという未知の世界でも、そこを押し広げて進もうとするところがある。そこがパウロといわれる完全主義者であり、神の世界に近づこうとする修行者なのだ。

ということは勝負師ではない。大山一五世名人のような勝負師ならこんなところで大長考はしない。無駄なことはしないで手抜きする、あるいは省略する。真理を探求するのではなく、目の前の一局をどのように勝ちにもって行くかに絞って考える。相手はこういうときにこうくる傾向がある、こういうことをされることを嫌うといった戦略的なことを考える。「名手は要らない、

合格の手を指していれば相手が転んでくれる」というのが大山流である。それで幾多のタイトルを独占してきた。加藤はタイトルには恵まれなかった。ついでに思い出すのが、山田道美九段という棋士である。指し盛りで急逝してしまったが、眼光炯炯とした維新の志士のような人だった。この人が典型的な真理探究型の棋士だった。求道者というほうが相応しいかもしれない。この山田九段が大山名人に挑戦して敗れ去った。このとき「名人が次善手で来るので負けた」という感想を残した。こちらが最善手で指していると向こうも最善手で来てくれれば負けなかった。しかし名人は次善手で来たので、読みが狂わされて負けてしまったというのだ。いかにも真理探究者ならではの言葉であり、勝負師との違いを端的に、かつ皮肉に表現している。

さて局面は進んで角替りの局面となった。お互い角を持ち合って、それから先は「相腰掛け銀」になることが多い。しばらくは駒組みが続き、玉を囲いあうのが普通だ。ところが羽生少年はいきなり棒銀に出た。王様を真ん中に置いたまま、駒を組み立てることもなしにいきなり棒銀に出てきた。素人の将棋ならよく見かける風景である。縁台将棋ならいざ知らず、プロの正式対局でこんな場面はまず見られない。この瞬間加藤九段は大きな空咳を「ゴホン、ゴホン」と何度も繰り返した。よほど驚いたのだろう。対局中の加藤九段は動きが大きいことでも有名で、膝立ちになって盤を見下ろしたり、激しく駒を叩きつけたり、ネクタイを直したり、見ごたえはある。その迫力が相手の棋士を萎縮させる意味もあるらしい。少年の羽生はこのときそっぽを向いて「ぼくは何もしてないよ」という顔をした。いっぽう加藤九段は「こんな馬鹿な手にこのオレが負けてたまるか」とばかりに、駒音も激しく進めていった。

羽生は一直線に棒銀を進めて、その銀を捨てて香車が成り込める形にもってゆく。加藤の応手は重厚にして積極的、羽生陣の奥深くに角を打ち込んで羽生の飛車を追い立てる。角と銀に追われて羽生の飛車が中央に転戦している間に、加藤は陣容を整えて厚い模様を作る。それでも羽生の応手は落ち着いていて、金で角の動きを抑えつつ、玉を守りの最前線に出動させた。玉をそんな危険なところへもってゆくのは指しにくいことおびただしい。これも加藤がそのように指させたという意味合いはある。中盤では加藤指しやすいという形勢に動いた。

羽生の香車はいつでも成り込める形になってはいるが、成り込むには馬鹿らしい焼け野原となっている。この辺も加藤の老獪なところで、香車が成り込んでも何も取れないばかりか、ただ孤独に立ち往生するだけになりそうなのだ。こういうのを「焼け跡に焼夷弾」という。何も無い焼け野原に焼夷弾を落とすような、とはいかにも敗戦国らしい表現ではある。終戦直後に将棋が大流行したころは、大いに実感があつた。さらに加藤九段は銀を引き戻し、ますます陣形がしっかりしてくる。ここで加藤九段は桂馬を跳んで攻めてゆけば、はっきり勝勢だった。しかし羽生五段には早い攻めもないだろうと、飛車を詰ましに行った。こんな中盤で飛車を取られては、為すこともなく読みを打ち切る場面だ。

ところが飛車に「詰める」を掛けられたとき、羽生少年はとんでもないことを考えていた。飛車を取らせよう、その間に相手玉を一挙に詰ませてしまおうという恐るべき構想を立てていた。詰ましにいった飛車は逃げてくれるものと加藤は思い込んでいた。その飛車を追い詰めながら、しだいに優勢を勝勢にもってゆく作戦だった。飛車を逃げずに取ってくださいときたので、一本道になってしまった。その間に香車を自陣に打ち、その先に歩を打って加藤の金銀を取りに行った。加藤は取った飛車を羽生陣の急所に打ち下ろした。それも王手をしながら打ったのではなく、前に打ってあった歩の蔭に打った。次に歩を成れば、飛車が王手をしながら成り歩が金取

りになる。その時点で受けなしになってしまう。加藤はこれで勝ったと確信していた。ところがここで羽生の伝説の一手「5二銀」が放たれた。加藤の玉はこの一手で捕まっていたのである。打ち込んだ銀は加藤陣の金でも飛車でも取れる。しかし取った途端白玉の退路を断っていたのである。こんな手は普通出るものではない。鬼手とも妙手とも表現しがたい恐るべき一手だった。その数手後に加藤九段は投了した。

この年羽生五段は、NHK杯戦で大山・中原の両永世名人、谷川現名人（当時）、加藤前名人と「名人」と名のつく棋士たちをことごとく破って文句なくNHK杯選手権者となった。その後もNHK杯戦に優勝を重ね、誰もなしえなかった「永世」NHK選手権者となっている。その後棋界の第一人者となった羽生がまだ一八歳にして五段だったときのこの一局が、伝説となっているのも今となってはうなずけるところではあるが、当時はこの白面の貴公子のような少年の登場はあまりに鮮烈であった。しかも相手が誰であろう「神武以来の天才」といわれて、少年の頃は豪傑たちをばったばったとなぎ倒してきた加藤九段なのだ。それが四八歳となって今度は天才少年にこんな冴えた手を食ってしまった。この一局はいくら鑑賞してもしきれないものがある。

その後の羽生は七冠王となってその強さをいかに発揮してきたが、いまや四六歳となって三冠から二冠となり往時の強さは失われつつある。そんなときに一四歳にしてプロ棋士のデビューを果たして、いきなり二九連勝という記録を打ち立てた藤井聡太四段が登場してきた。棋界ばかりでなく世間全体の話題をさらい、NHK杯戦で森内永世名人（四六歳）と対局が決まり、注目が多いうことで時間も延長し生中継された。戦前の予想では永世名人の称号をもち幾多のタイトルを取ってきた森内が優勢と誰しも見ていた。森内が先手で得意のやぐら模様に進めると藤井四段はそれに応じてやぐら将棋となった。相手得意のやぐら戦法を避けようと思えば避けることが出来た。「森内先生にやぐらを教わろうと思いました」と局後に語った。余裕とも自信とも謙虚とも受け取れる言葉である。この一局を見ていると、特別にすごい手が出たわけでもなく、少しずつポイントを重ねて行って最後に勝ちを握ったという将棋だった。少し優勢という将棋が一番難しい。野球でも一点リードの試合がもっとも苦しい。優勢なほうは大事に指そうとするし、不利な方は思い切った勝負手を連発してくる。藤井四段は優勢の局面を少しずつ伸ばして行って勝ち切った。今までのところ藤井四段の将棋に「これは凄い」と唸らせるような奇手とか妙手は出ていない。水が流れるように自然に勝っている。すでに八段くらいの実力はあるものと見て差し支えないだろう。しかもごく自然に名人位とか王将位に着いてしまうような雰囲気をもっている。

羽生は終盤の絶体絶命というような局面から、奇手妙手を連発して大逆転を演じてきた。どんでん返しをして見せるというのは、見ている者に感動を与える。羽生マジックといわれ、奇跡的な勝ち方をしてきた。確かに見応えがあった。鮮烈なデビューをして登場してきた藤井四段は、こうした棋風ではない。安定した横綱相撲のような指しぶりである。かくして世代交代してゆく。羽生世代は羽生が棋界から去ってゆくと同時に消え去ってゆくことになり、藤井世代が登場してきて、棋界が盛り上がりゆくことになるはずである。また睡眠薬になるような一局が指されることを待ち望んでいる。（完）

第五章 (その1)

少年時代の様に楽しい時もありました。そして一つならずの情景が、偉大な喜劇となって私に照らし出しました。ここにあるのは写真による歴史です。ゴンティエは写真の芸術家でした。私たちの隣に何時もいた第十四連隊・タルブ砲兵中隊の或る上等兵は、無邪気にも婚約者のために自分の写真を撮りに来ました。ゴンティエには一つの考えがありました。彼が芸術の技術を除いてあらゆることを教えていた男がランドリーでした。そして、彼はその上等兵に言いました、「私は素人でしかない。しかし、その人は本物の芸術家で、プロの人間だ。もしもあなたが興味をお持ちなら、最も美しい肖像写真を手にするだろう」。ランドリーも良く聞いていました。ところが上等兵は帰って仕舞い、話は進展しませんでした。ランドルミーは言いました、「あなたは暗い時に、肖像写真を撮りたいのですか。あなたは黒人になりますよ。あなたの婚約者は黒人の婚約者じゃないですよね」。相手は逃げ帰って仕舞いました。日中に彼と再び会いました。ランドリーは言いました、「光は十分にある。あなたは死人の様に白く写るだろう。彼女を泣かせたいのですか」。しかしながら戦闘に就かなければなりませんでした。ゴンティエは、所謂写真家にシャッター無しの小さなカメラとシーツの布切れを与えました。「かちっ、かちっ、と鳴るだけで、写真の音以外のものはもう動いてはなりません」。ランドリーは、城の横で撮るために立ち去りました。しかし彼は気長な顔で戻って来ました。「私を気にしているのは上等兵ではないのです。彼は正面の顔と横顔のポーズを取るだけで満足しています。しかし、彼は私が撮るのを見ていて同じ様にお金を支払う約束をしましたが、撮るのを注文したのは歩兵隊の将校なのです」。「もう動かないで下さい。そして、かちっ、かちっですから。でも、私は暑く感じていましたよ」。これはランドリーに言うために僅かな時間続いた演技でした。「私はあそこで、あなたを探している歩兵隊の将校を見ましたよ」と私は言いました。私たちはその後、上等兵にも将校にも再会しませんでした。このランドリー自身は蒸留器を備え付けて、地下室に多量に漬けてあったプラムで蒸留酒を作る方法を発見しました。それは敵が残したものであり、私たちが静かにしているための何回かの一斉砲撃の代わりであると彼は言っていました。私は最初の一杯を飲む栄光に授かりましたが、それは部下をひっくり返すためだったのです。私とその日に、そしてその後にも知ったことなのですが、アルコールは恐怖を癒やします。

この生活は少しも軍隊らしくありませんでした。しかし、爆撃は普通にありましたし、交差点での何時もの五時の空砲もありました。その歩兵たちは、私たちよりも用心していませんでした。彼らはオペラ座広場で自惚れていたのだと私は推測しています。あちらこちらに災難があり、人間で一杯の納屋の中での大虐殺も二、三件ありました。これらの恐怖は電話交換兵の士気を上げることはありませんでした。私たちは二階や、薄い壁の後方や、亀裂だらけの屋根裏部屋の方へ追いやられました。そこで私は、蒼白い眼をしていて比類無く素朴な老人の新司令官その人と知り合いになりました。彼はあらゆることに無関心な様子をしていましたが、例の挨拶は別でした。彼が、この危険な場所に落ち着いた私たちを見た時、彼も又そこに住居を定めました。私が彼にサイン用の書類を渡した時、屋根裏部屋に爆発と爆発音が反響し、ドアが破れ、激しい煙で私たちは投げ出されました。私は助かったのかどうかも分かりません。しかし、彼はサイ

ンをしている最中でした。彼も又、瘦せた厳格なヤンセン派の人で、中斷することなくサインを終了して保留した儘にしませんでした。その後、私たちは殆ど友人になりました。ドイツ軍の七七ミリ砲の薬莖と比べて我が軍の薬莖が巨大なのを私に教えてくれたのは彼です。彼は言いました、「我々は煙の出ない火薬を探したのだ。そして、それを発見した。しかし威力を犠牲にしているのだ」。実際に敵の大砲が六キロメートルの処にあっても、吹き放す煙で比較することが出来ました。ゴンティエが言った様に、一門の大砲がある場所を見付けて、それを壊せるのかが勝負になると思うのは重大な誤りです。私はこれを問題にしているののでつけ加えて言いますが、煙は夜や昼でさえも発砲の大変正確な目印になります。発砲の場所を分からなくすることは有利になるのです。我々の大尉は、煙が出る古い黒色火薬を夜の発砲に使用することを考え出しました。昼間になって彼は、敵の視界に入らない小さな谷に大砲を移動しました。そうして黒色火薬での発射は調整が行われました。夜には移動して調整後の煙の出る発砲を行いました。彼は技術者でした。しかし私たちにおいては、何時も無視されている砲兵の仕事の役割があるのです。私は他のことを考えてそう信じているのですが、それは砲弾が落ちた場所の近くを見に行くことです。遠くからこれらの調整を行っても屢々果てしないのです。私もそれらの仕事に時々参加しました。私には一つの考えがありましたが、受け入れて貰えませんでした。一発が発砲されます。落下を観察し、長ければ短くされ、短ければ長くされます。数々の偶然から際限無く続けられることもあり得ますが、発砲距離は恐らく十分に点検して行われます。照準を変えずに少なくとも六発発砲して、平均の落下地点に従って調整しなければなりません。幾何学的に作図するのは大変容易です。でも、それは恐らく決して行われません。正確な発砲が期待されます。そして、それを発見した時、「調整は終了した」と言います。しかし、発砲の何を証明しているのでしょうか。私は、理工科大学校の教育が何の役に立っているのかと自問します。彼らは一つの考えも最早決して養成しない点で、厳格な学習に対して疲れているのではないのでしょうか。あるいは寧ろ、彼らが先生たちを受入れたのを私は見たのですが、命令するコツや服従する術策によって完全に自分のものにさせられたのでしょうか。先程私が結論としたことと同じ結論には戻ります。私たちには国家防衛のことが語られますが、人々は私たちを嘲笑します。実の処、主人と奴隷の古代の戦争が重要であり、そこでは主人は決して間違っていないのです。

厳格なヤンセン派のこの司令官は、或る日私がまさに七五ミリ砲の砲兵中隊に意見を伝えたばかりの時の人物です。彼は言います、「あの時あなたが信じているのは、彼らが非常に長めに砲撃していると伝えられているから、何かを変えるだろうということです」。そこで私は答えました、「私はあなたが確かでないことしか思い描かないのを忘れていました」。これは術学的なものでした。そして彼が私に良く答えたかも知れないのは、人は自分の意志だけによって支えている希望以外に、希望は無いということです。彼は何も答えませんし、それからより一層静かになりました。その上、彼はその後間もなく私たちから去って行きました。私はこの大変に素朴な上官のことを話して来ました。しかしながら、司令官に許されている素朴さは、恐らく大尉には無いことを忘れてはなりません。それは殆ど全てを決定し、殆ど全てに答えるものであるからです。これは宿営地で大佐が時々父親らしくなったり、何時も將軍でいるのと同様です。しかし大佐も將軍も、殆ど私たちには問題になりませんでした。

私は中佐の訪問を思い出します。それは私の中に大いに拘っている一つの考えを目覚めさせます。私は文書を十分に保存していません。仕方がありません。私は市民兵の経験を通して読者

であるあなたを自然に導きます。寓話には一つの道徳がなければなりません。ところで私は或る日のことが思い出されました。私を待っていた或る中佐に、私は交差点で出会いました。将校たちはもう少し遠くに集まっていて、秘密の対談を観察していました。彼らはあれこれ奇妙な推測をしていたかも知れませんが、私が言われたことは次のとおりです。一番目は、中佐はベルグソンのことを話しましたが、私はベルグソンのことは知らないと答えました。私はベルグソンについて話すのが好きではありません。ベルグソン哲学の信奉者たちと私たちには門下生同士の競争があります。二番目に、彼は中立のベルギーへの不法侵入に関して私が考えたことを尋ねました。それは、私が今でも信じていることですが、戦略の全ての流れにおいて二十年前から告げられたそれなりの軍事策略であったと私は彼に答えました。その点について彼は、私が大変誠実に兵役に就いていることを感謝していました。そして、これで全てです。多分、聖戦を説くために私は少しは当てにされていたのです。自然な動きとして私は先ず宣伝業務を伴う、全ての繋がりを切りました。そして、今日ではそのことを嘗て無い程喜んでいます。何故なら大戦前の数年には我が国の軍人たちに同意した外交官たちが、ドイツ軍の配備がその必要な動きを齎す様な状況になったため、ベルギーによって攻勢への用心を準備していたことを今日私たちは記録によって知っているからです。もし私が侮辱された道徳の名において、明らかに実力行使の侵入に対してその当時反対していたなら、今は本当に自慢して当然だろうと思います。しかし政府の偽善と呼ばねばならないことを最早考慮しないなら、いずれにせよ戦争が道徳を侮辱すること、そして子供が非常に驚くことを私は少なくとも知りました。しかしながら私は隠れ家で熟考し、そして不用心に思想を使う人に、思想がもう一度噛み付くのに気付くための時間を持ちました。私が考えたばかりの考察は、問題を少しも終わりにしません。そして私の教育のために、議論するのが非常に上手な想像上の幕僚長を私は作り上げました。彼は或る日私に言います、「何故あなたは有益な意見を軽蔑するのか私には分からない。もしも敵に対して協定に違反することが許されるなら、嘘をつくこと、躊躇することなく自分自身で大変上手に行う行動には懲戒することも許されているのである。その嘘が有益であるかどうか、そして最も破廉恥な嘘が最も有益でないかどうかを知ることが少なくとも重要である。例えば私たちが、捕虜たちを虐殺しないことを人々が知ることは有益である。何故なら私たちは敵の中にも又、彼らが生命を救済するために赴くことが出来るという観念を、その様にして伸ばすからである。しかし敵が捕虜たちを虐殺すると信じさせることも有益である。というのも、包囲された我が軍の仲間たちはその時、捕虜になれば虐殺されるので最後の最後まで防戦するに違いなく、それは我々が願っていることに違いないからである。しかし、あなたが祖国のために死ぬとしても、祖国のために嘘をついて恥じるのを私はどんなに躊躇しても理解しないのである」。そこまで自分の思想を導かなかった者は、自分の気に入るものを思想と呼ぶことに私は疑います。戦争は人間を素っ裸にします。彼は辛い思いをしてイソップの思想に戻ります。ソクラテスは自分の思想も又、権力に従うのを拒絶したために、大変確実に刑を宣告されました。私たちは恐らく、ソクラテス以来全然進歩しませんでした。恐れぬこと、節度を保つこと、何も信じないこと、これが独裁に反対する三つの方策です。幾人かの人々はその様に定めて公的精神を生じさせていますし、それで十分です。戦争や、権力の濫用や、非常識な富の集中の如き人間の誤りは、学識が深いと見做されている人々の信じ難い盲目によってしか可能ではありません。過去の虐殺によって自分の判断を形づくることは重要です。他に英知はありません。

この物語を思い出してみましょう。丁度、私たちがいる頃に、一九一五年の初めですが、スパイ話が幾つもありました。その嫌疑は身を守るのが難しい病の様なものであることを私は知りました。ドイツ軍の或る将校が、我が軍の前線を歩兵隊の中尉に扮して探っていると語られていました。彼のことで分かっていたのは一つだけでした。それは将校が被る庇付きの帽子に番号が付いていないことでした。或る冬の日には私は、砲兵たちが非常に恐れていた場所であるジュリーの森を監視する任務に就いていました。電話交換兵も交替で自然と歩哨に立たなければなりません。従って全員が監視することを覚えますし、電話することを覚えます。誰も予想しなかったこれらの戦場での状況は、どうにかこうにか組織的な形態を取っていました。ル・バルビュ中尉はバルコニーにいましたし、私は避難所前の溝の中にいましたが、その時に或る将校が質問をしながら土手を飛び越えて来ました。「ここには七五ミリ砲の監視所はあるか。どんな砲台か」。私はこれらの質問に決して答えてはいけないことを知っていました。彼は素っ気なくて急いでいましたが、私は非常に冷静でした。私は何時もそんな小さな事件を少し楽しんでいました。両眼を上げながら少なくとも私は、番号の無い庇付きの帽子に気付きました。精神には、これらの出会いに対しては力がありません。私は、そこから遠くない処に凭れ掛かっている斧のことを考えながら、ホメロスの様に彼の頭を割ろうかどうか考えていたことを白状します。そうしている間に、私は考えをその将校へ戻した時には彼に道を教えていました。彼は突然に反対側に姿を消しましたので、私は嫌疑を確認するだけでした。私は自分のためにもこの話を黙っていましたが、それで良かったのです。翌日、歩兵隊の一人の斥候がポーモンの前を走っているのを私は見ました。すると皆が興奮しました。スパイが追跡されていて、捕まりました。実際に逮捕されると、彼は名前を名乗りました。彼は我が軍の歩兵隊の中尉でした。その時に言われていたのは、まさに將軍の息子だったのです。しかし、人々が言っていることは全てが間違っているという原則を私は発見しました。

私たちの遙か後方の森の高い処に、時々照明弾が発射されました。更に私には時間と、棒で一直線にする方法から場所を出来るだけ書き留める任務がありました。正確で忍耐強いこれらの仕事は、私には良く合っていました。調査が行われ、〈眼に見えない人々〉と呼ばれた人々の地方においては試みることが重要でした。何故なら、或る日〈軍団〉の敗北した場所を探しに行った時に、全員がホライゾン・ブルー(1)の軍服を着た軍人たちを私は発見したからです。兎に角、私たちは黒又は濃い青の服を着ていました。そして、この奇妙な状況は夏まで続きました。これらの色は黒い服の二人の兵隊から離れた、ドイツ人捕虜を見分けるには重要であり得たと同じ日に私は認めました。千メートル以下の処で彼は消えました。他の二人も彼を見失った様に見えました。従って私は、〈眼に見えない人々〉の側から、後方へ向かったの謎を探すのを中断しました。しかし話は他にもありました。彼はポーモンで三人の市民がいる処に止まっていた。何時もベッドで横になっていた祖父と、介護をする祖母と、せいぜい十二歳に見える孫娘です。ところが砲手たちは、顎髭を生やした大柄の老人が下方にある砲台を探索しているのを夜に見たと言っていました。良く導かれた幾つもの発砲は、想像しても怖がらせました。麻痺した中風患者は仮病だったかも知れませんでした。そして、その家の位置がランプによって、敵にとっても目印になることは可能でした。事態は事実として受け取られました。スパイの中のスパイがここにいるのですが、全く自然な成り行きでした。というのも班の何人かはそこに泊まっていたからです。一頭の雌牛もそこに残されていました。私は単にそこへもう少し進みました。私はカフェ

・オ・レと地図の一部を認めました。中風患者はベッドから離れず、窓にはどんな光も輝いていないことを私は確認しました。間もなく一台のトラックが到着して祖父母と孫娘を乗せて行きましたが、些か涙も流していました。それから彼らの家は、他の家と同様についに略奪されました。砲弾はその家に少しも当たらなかったのは事実です。そして、この偶然は明らかになりました。見えないものを信じることを如何に自ら禁じれば良いのでしょうか。

今度は、ゴンティエに感動する番でした。ところが事は私たち二人に止まっていたましたが、実際には重大でした。我々の第三砲兵中隊の或る曹長は彼の上ではなく、後方の、彼が通り過ぎた監視所の一つ一つに砲弾を引き付けていることにゴンティエは気付きました。この曹長は私たちの仲間ではありませんでした。そして彼はいい目を見ていたのです。ゴンティエと私はそのことを、私たち自身を嘲笑するまで非常に真剣に、まさに私たちの身を守るつもりで語り合いました。しかし、もう一度偶然が良き劇作家になりました。或る日の午後、私は電話交換手の私の椅子の後方で、将校たちが揃うに至ったのを見ます。私の方を見て少しの間躊躇していました。そして次に大変注意深くドアが閉められ、少佐が私に言いました、「あなたはこれから一言も決して聞いてはいけません」。私は忠実に約束を守り、今でも未だ守っています。しかし重大なことは、秘密であることが重要なのを私は良く理解しています。単に起こったのは次のことです。やっと議論が始まりました。誰かがドアを激しく動かして開けさせました。主張したことが受け入れられた様に私には見えました。それは問題の例の曹長でした。私は大変に無分別な考えが、その点について私自身の裡に生まれました。そして、この第三砲兵中隊は永遠に分隊から去りました。そして私は最早、私の小説話のことを考えませんでした。

あらゆるスパイ話について或る日、T大尉と一緒に考えながら私はついに確実に納得のゆく一つの考えに到達しました。私たちには村の外れの或る屋根の下に優れた監視所がありましたが、多分敵からは少しも見えません。そこはスパイに対しても大事な秘密の場所でした。ところで、その監視所は私たちが知り得た限り、壊されたことも狙われたこともありませんでした。その反対に敵は、一人の監視者もいなかった教会の鐘楼を狙っていました。この種の数々の指摘は全てのスパイ話にけりをつけます。スパイは何人もいると思います。私は、スパイの物語も何冊か読みました。彼らのやり方は大変に巧みで興味があります。しかし、それは頭で考えたことでしかありません。シュマン・デ・ダムでのドイツ軍の驚きやカンブレーでのイギリス軍の戦車攻撃の様に、重要なことはスパイたちに分からないのです。彼らが相手の秘密を暴いたことは断言されています。でも、私はそのことを余り信じていません。(つづく)

(1) 第一次大戦中及びそれ以後のフランス軍の軍服の色。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫻自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつばら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年10月号）

アラン『大戦の思い出』（五）：戦争体験者でなければ書けない実態を知りました。悲惨な生活、若い猪と遊んだこと、最も尊敬すべきものが人質になったり、自分の部下を殺したり、略奪や畑荒らしもした。目の前の戦争からは逃げられなく、望まなかった戦争に参戦し、権力者たちの教訓は望まなかったけれど、義務として困難な中へ進んでいったという。戦争が始まりませんように。

酔狂洋酒談義（二）：色々な洋酒があることを知りませんでした。楽しく拝読しました。

三浦逸雄の世界（二十三）：無邪気な少年の姿に惹かれました。

気になる雲：「韓国詩人協会詩の祝祭」に招かれて素晴らしいことですね。韓国、中国、日本の詩人たちが熱望しながら、なかなかかなえられない難しさがあるのですね。

われらも拉致被害者：めぐみさんを待ち続けて四〇年。八〇年には八人が戻ったけれど、多くは逃げられずにいる不条理。もう時間がないのです。それを解決できないばかりか、怪獣に振り回されている今の私たち。早く返して！！ ただ平和を願っています。

青鬼：ゲームの楽しさを知らないので、青鬼に追いかけられる怖さも分かりません。超時代遅れの私です。

不平等の源泉：競争を利用する監督さん。売り上げをのぼしたい社長さん。教育者も競争を煽っている。それは不平等の源泉だった。死に物狂いで病気になったりしています。最終連に共感しました。

その一発：アンカラで遭遇した銃撃音、危険地帯だった。戦争末期の日々のすさまじい体験を思い出す。そんな日々は繰り返してはならないと思います。

白雲はるか：青空にはるかに浮かぶ白雲は美しいですね。地球温暖化防止をしないと危ないと問われ続けていますが・・・

秋夕：蝉の声から、何時しか虫の声に変わっている秋。コスモスが咲いて、おだんごを供えて亡きひとを偲ぶ。祖国統一をねがう作者に、最終連が哀しいです。

生々流転：生命あるもののそのものの姿が、壮大なスケールの自然観や人生観がダイナミックに描かれています。

花咲く庭で：生涯にこんなに花を貰ったことないほど、ご褒美のように花に埋もれて、苦の娑婆から解かれ、仏さまのような顔をして、花の咲く庭から旅立って、無限の沈黙を飲み込んで逝かれたひと。（何の意味もなかったのでしょうか・・・）おじさんの顔を思い浮かべています。（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

第40号 (2017年11月登録)

<http://p.booklog.jp/book/118531>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/118531>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト